

小学校

光村ポケット 国語

自分で選ぶ 文学の学び

1年間の学びの集大成となる3学期。一人一人の児童が、読み深めたい観点を選んで学びを進められるように、2年生以上の3学期文学单元には、「選んで読み深めよう」を設けました。授業でどう扱うとよいだろう——。そんなお悩みに、茅野政徳先生が答えてくれました。ぜひ、授業づくりにお役立てください。



連載第3回 国語における探究的な学び



光村図書



LINE公式アカウント友だち募集中!
授業づくりに役立つ情報を、
いち早くお届けします。



【教授用資料】本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

自分で選ぶ 文学の学び

1年間の文学の学び

1 学期

表現や構成に着目し、文学の読み方を学びます。

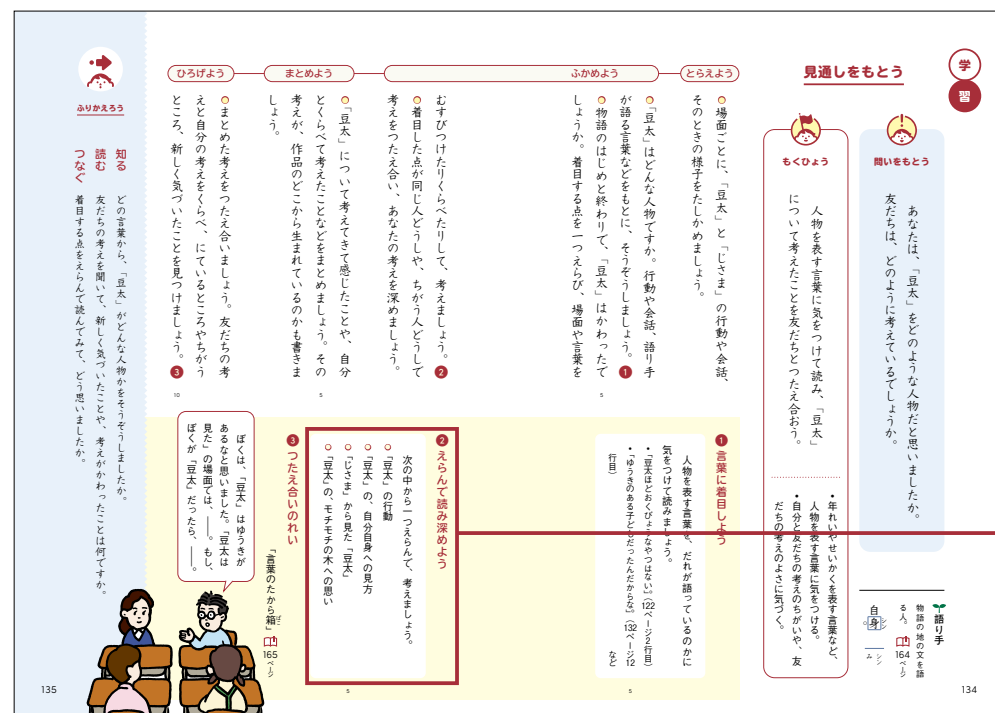
2 学期

多様な作品を読み深め、自分の考えを形成します。

3 学期

「共有」を重点的に学習します。さまざまな考えを交流できるよう、児童一人一人が読み深める観点を選ぶ、「選んで読み深めよう」を新設しました。

次学年へ

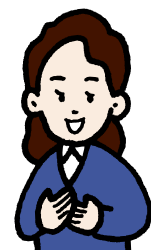


「モチモチの木」(3年下 134-135 ページ)

個別最適な学び×協働的な学びの点から

読み深めたい観点を児童が選ぶことが、「個別最適な学び」につながります。一つの観点に限らず、複数の観点を選んだり、提示されているものとは別の観点を選んだりしてもよいでしょう。児童がどの叙述に着目しているかを見取り、共に観点を選ぶなどの手だてを講じることも考えられます。

また、一人一人が自分で観点を選ぶことで、「自分が読み深めたことを伝えたい。」などと、考えを共有する意欲が生まれ、「協働的な学び」につながります。



同じ観点を選んでも、違う考えの人がいて、おもしろかったな。他の観点を選んだ人の考えも知りたいな。

「選んで読み深めよう」を設定している単元

- ・ 2年下：「スーホの白い馬」
- ・ 3年下：「モチモチの木」
- ・ 4年下：「スワンレイクのほとり」
- ・ 5年：「大造じいさんとガン」
- ・ 6年：「海の命」



「選んで読み深めよう」

—— 実際の授業で、どう使う？ ——

「選んで読み深めよう」に取り組むうえで、先生方からよくいただくお悩みについて、茅野政徳先生（山梨大学教職大学院教授）にお答えいただきました。

✓ 児童が観点を選ぶときに、教師は何に気をつけたらよいですか。

「選んで読み深めよう」は、1学期から培ってきた「構造と内容の把握」、「精査・解釈」の力をいかして学習する場です。児童が観点を選ぶときは、「それぞれの観点は、前に学んだ学習とどのようにつながっているかな。」などと問かけ、既習の内容を想起できるようにするとよいでしょう。

✓ 学級内で選んだ観点に偏りが生じた場合、どうしたらよいですか。

児童が選ぶ観点に偏りが生じるのは自然なことです。もし、極端に偏りが出てしまった場合は、選んだ観点について読み深める前に、自分が選んでいない観点に対して考えたことを共有する時間を、学級全体で設けるとよいでしょう。そうすることで、同じ観点を選んだ人がいない児童も、他者の考えを知ることができ、学習しやすくなります。共有するときは、ICT機器を用いると、他者の考えを一覧しやすく、効果的です。

✓ 一人で読み深めることが難しい児童には、どのような手だてを講じたらよいですか。

一人で読み深めることが難しい児童に対しては、読み深めるためのヒントを示したカードを作成して配るなど、個別に支援しましょう。例えば、5年「大造じいさんとガン」で「情景などの効果的な表現」という観点を選んだ児童に対しては、4年下「学習に用いる言葉」(P172)の「情景」の欄を参考に、情景とは何かをカードに示します。そのうえで、下段「言葉に着目しよう」で取り上げた情景描写を確かめるように促しましょう。また、同じ観点を選んだ人どうしでグループを組んでもよいですね。

✓ 個々で読み深めたことを、どのように共有するとよいですか。

児童と共に学習過程を考えることが大切です。「どのグループから発表すれば、この物語を読み深めることができるだろう。」などと問いかけることで、児童が、それぞれの観点の関係を考え、見通しをもって学ぶきっかけを作ることができます。また、共有を終えた段階で、児童がまだ気づいていない部分があれば、「ここに注目したら、さらに読みが深まりそうだね。」などと再考を促すことも重要です。

✓ 来年度の3学期に向けて、1・2学期に何をしておくとういいますか。

1・2学期は、「選んで読み深めよう」につながる「構造と内容の把握」、「精査・解釈」の力を重点的に育むことが大切です。それぞれの単元で、児童と共に「目標」を確認し、どのような資質・能力を身につけるのかを押さえたうえで、学びを進めるようにしましょう。そうすることで、3学期までに読み深める力を培うことができ、「選んで読み深めよう」の学習に活用することができるはずです。

国語で身につける資質・能力は、他教科での学習や探究的な学びの基盤にもなります。第3回は、国語の学びを教科に閉じずに、授業の外でも使っていける児童を育てるための、単元づくりのポイントについて、溝越勇太先生（筑波大学附属小学校教諭）に教えていただきました。

Q.1

探究学習の中で国語の学びをいかす、先生のご実践について教えてください。

1年生の1年間、「花」をテーマに学習に取り組みました。ゲストティーチャーである、地域の花屋さんから、「お店にフラワーカードを飾ってほしい。」と依頼された子どもたち。カードを作るために説明的な文章（1年下「つぼみ」）の学習をし、最後は、完成したカードを町のいろいろな店に飾りました。その後、お客さんに押し花しおりをプレゼントしたり、花の詩を作って町の人に紹介したりと、学びをつないでいきました。花を通して、子どもたちが町を知り、町に愛着をもち、町に貢献する。国語の学習をいかしながら、社会参加学習・地域貢献学習に取り組んできました。

Q.2

授業を構想するときのポイントやコツはありますか。

●子どもの学びを「つなぐ」

探究学習をデザインするときにはいちばん意識していることは、学びを「つなぐ」ことです。子どもの興味・関心のあるものと、国語の学び、他教科の学びをつなぎ、学びのストーリーをデザインします。

4月に新しい学年が決まったら、全教科の教科書を並べ、同僚の先生と共に計画を立てます。教科を見渡しながら、繰り返し体験したり、地域の方と触れ合ったりできるテーマを探します。

次に、活動と学習内容をつなぎます。「国語の、手紙の学習は、体験学習のお礼を書くときに行おう。」「町に飾るものは、図工の時間に作ろう。」「生活科の内容項目『地域と生活』は、教科書に載っている活動ではなく、体験学習の中で扱おう。」といった形です。

一見大変そうですが、初めに時間をかけて単元をデザインすることで、学びの必然性が生まれ、各単元の導入がスムーズになります。また、「インタビューは、

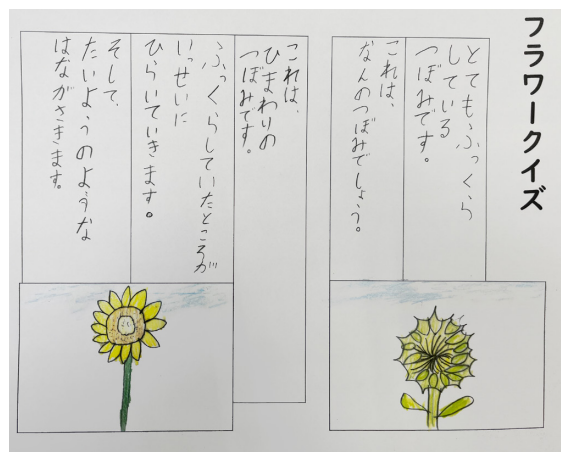
地域に出て学ぶときに扱おう。」などと決めることで、同じ学習内容を生活科でも国語科でも重複して指導するといったことがなくなります。教科を関連させながら学ぶことで、時間にも余白が生まれるのです。

●ゲストティーチャーの役割

ゲストティーチャーには、専門的な話だけでなく、次の学習につながる依頼や、時には次の課題が明確になるため出しをしてもらいます。用務員さんなど学校の中の方や、保護者の方でもかまいません。「町にカードを飾りに行こう。」と、教師ではなくゲストティーチャーから提案してもらうことで、学びのストーリーが自然で、必然性のあるものになります。

●探究学習の中で国語の学びを「使う」

探究学習では、実社会や実生活と関わる体験活動を行うことが大切です。その活動を確かな学びに高めていくのが言葉です。価値ある体験活動を一人一人の学びとして仕立て上げていくには、国語科の学びが鍵となります。教室を出て、いろいろな人の話を聞いたり、仲間と話し合ったりするなど、国語を実際に「使う」。その中で、国語科で身につける力も伸びていきます。探究学習と国語科の学びは非常に相性がよいのです。



児童が作成したフラワーカード

